

## 福島雅蔵著：『近世畿内政治支配の諸相』

和泉書院 2003年3月

A5版 318頁(索引とも) 本体8,000円

本書は、はじめに(序章)の冒頭において、福島氏自身が、『幕藩制の地域支配と在地構造』(柏書房、1987年10月)のあとをうけ、前著のなかで第一部地域の政治支配の諸論稿をひきつぎ、関係の小稿をあつめ編集したものと記すように、前著の後編とでもいうべきものである。

その意味では、前著に収められた論稿が、1983年までの成果に立脚したもので、その対象とした地域も河内・和泉両国における地域社会を扱ったことと比べれば、地域的な拡がりも有しており、前著でふれることができなかつた諸点なり課題を、補強かつ配慮したうえで構成となっているものと考えられる。

つまり本書は、氏が長らく取り組んできた畿内とその周辺の地域社会における政治支配の実態を、つまびらかにしたものと見えるであろう。

まず、本書の構成を示しておく。

はじめに(序章)

### 第一部 諸領主による上方領政治支配

第一章 近世後期大和芝村藩の大庄屋支配と触書—宇陀周辺預領を中心に—

第二章 清水徳川家の農村統治—寛政期の泉州領を中心として—

第三章 近世後期常陸笠間藩牧野氏の上方領統治

第四章 常陸下館藩石川氏と河州飛地領—幕末期を中心として—

第五章 近世後期畿内遠国奉行の一側面—堺奉行の事例を中心に—

### 第二部 幕府撰国絵図・国郷帳の基礎的研究

第一章 天保国郷帳・国絵図の調進と在地村落—御三卿上方領を中心として—

第二章 河内国天保国郷帳・国絵図の調進—村方史料を中心として—

第三章 「和泉一國之圖」についての基礎的考察

第四章 「和泉国正保村高帳」についての若干の史料

第五章 近世「竹内街道」私考

あとがき

これらは、第一部第四章および第二部第三章が新稿であるほかは、氏が雑誌等に1987年から2001年に掲載したものによって構成されている。

以下では、各章の概要をまとめながら、問題点・疑問点などについて、私見を交えながら論じることしたい。

第一部は、幕領、御三卿領、関東譜代藩の上方飛地における近世後期の統治の様相を論じた五編から構成される。

第一章は、大和芝村藩が、大和幕領の預地支配を行っていた明和・安永・寛政期を対象として、藩・南都奉行・京都町奉行それぞれから発給された触書から、その廻達方法と順序、発給元の相違による内容の差異などを丹念に示し、預地における重層的な支配の仕組みを読み解く。あわせて、藩役所発給の廻達や触書から、大庄屋の性格や機能を明らかにしている。

これは、重層的な支配を受けた地域における統治の事例といえよう。扱う地域は、宇陀地方だけであるが、芝村藩の他の預支配地においても、適用されるものと考えられる。

近年は、歴史学の分野で、中間支配層の機能や機構を通して、個々の村落を越えた広域支配行政の理解が盛んとなりつつあるが<sup>1)</sup>、その先行研究として位置づけることも可能であろう。

第二章は、寛政期の改革政治の一端として、御三卿の一つ、清水徳川家の泉州領での農村統治策を示したものである。清水領の農村統治策は、幕府の寛政改革の「農本主義」を執った諸政策を模範としていると捉え、どのような点で類似性が見られるのかを農民統治の触書や廻達から探る。また、同時に行われた郡奉行を始めとする廻村と、その下達からも類似性を見いだしている。

なかでも、備荒対策としての夜半の稼仕事である増稼の奨励策などについては、地方史料をもとに、その実態に迫っている。

第三章では、常陸笠間藩主牧野貞長が、大坂城代・京都所司代・老中の役職就任にともない、上方に与えられた知行地の変遷を跡づけ、これら畿内・西国領の統治に実際に当たった地方諸役人の役職と、職務内容についてふれ、飛地政策の姿勢を明確にする。さらには、上方領の年貢収入などを担保として、都市に住した豪商、さらには藩領村落にも借財先を拡げている点などを指摘し、藩

財政の赤字を取り繕うための実態を論じる。

これらの事実により、上方領が、藩財政上において大きな意義を有していたこと、さらに、貞長の老中退任後、上方領の喪失は家督相続者貞喜の「化政改革」によって、藩政改革を断行する必然性を導いたとする。

第四章では、常陸下館藩石川氏の河州飛地領を対象として、まずその統治政策を各種俚約令をもとに概観する。そして、家老の日記を素材に藩財政の建て直しのための借財交渉、貢租米の処理方法を明らかにする。また、借財は豪商のみならず、「年賦調達講」などの方法によって、村落全体に藩財政の負担を肩代わりさせる方向にあったことを示し、畿内・西国領は藩財政に大きく寄与する重要な役割を担っていたと位置づけている。

本旨には大きな影響を持たないが、この章で気にかかる点を指摘しておこう。まず飛地支配法令として、文化5年の触書的一条から、「一村ごとに田畑の持主・小作人を記入させ、木片・竹片に書き明示させたのは、安永年間からさらに進展して、全国的にみて先進地帯と言われる河内飛地領農村に、農民層分解が進行している現実の姿を、如実に示すもの」とするが、これをもって、農民層分解が進行している現実を捉えるのはいかがであろう。確かにこの時期、農民層の分解が進行していることについては多くの指摘があり、否定するものではないが、木片や竹片に一筆ごとの持主・小作人の名を記すのは、藩役人の廻村に際し、村落の土地所有の実態を即座に把握できる利便性が主眼となっているものと考えられる。

また、筆頭家老牧の日記をもとに、大坂において最新の砲術の知見を得たことや、市中の社寺、その他の見物が、諸方面の知識の摂取とする点も気にかかる。知識の摂取であることは確かであろうが、上方に職務で来た幕臣や藩士が物見遊山や芝居見物を行うことは一般的であった<sup>2)</sup>ことも考慮する必要もあろう。

第二、三、四章を通して、清水徳川家や関東譜代藩の畿内や西国の領地における統治の諸相や、藩財政の面で上方領においてその多くを依存していたことが理解できる。

氏の論じるように、御三卿や関東譜代諸藩が畿内・西国に役付地や飛地領を有することは、藩財政の逼迫を救うための打開策の一つとして、豪商

に借財を依頼する契機となる。しかし、これは一時凌ぎの施策に過ぎず、所領の喪失は、その借財の精算をとめない、財政をより危機的な状態に陥らせることを物語っている。まさに、畿内・西国領を有することは、藩財政面で「両刃の剣」ともいえるであろう。

第五章は、幕府の遠国奉行の一つである堺奉行が、近世中期以降、町奉行的存在にすぎないとした従来の説に対して、その活動を明らかにすることによって、修正を提起した論稿である。その具体的な活動として、二つの巡見を取り上げる。一つは、堺奉行着任後に幕領・私領を問わず行った泉州山手筋の巡見の実態を明らかにし、それが幕府巡見使に習ったもので、その意図を堺近接農村の村柄を熟知することにあつたとする。もう一つは、享保初年からの幕府の河川行政の多様化にともない、新大和川・石川の川筋支配の職務を分担し、川筋の巡見によって流域の農村地域と接触を持ったことを指摘する。

氏の指摘するように、これらは、町奉行的な日常の市中行政とは異なった次元のものと位置づけることは妥当であろう。

第二部は、幕府撰国絵図・郷帳にかかわる論稿をまとめたものである。なかでも第一・二章は、郷帳・国絵図調進作業について、地方史料をもとに、村落レベルでの具体的な調査の姿を明らかにしている。

第一章は、天保郷帳・国絵図調進にともない、一橋徳川家泉州領、清水徳川家の泉州・播州領において、領主の指令と領地村落側の対応を追求する。そこでは、国高調査は、幕領とともにそれに準ずべき村落については、始終厳格に進められていた事実を明かし、泉州領の村落では、詳細な一村限絵図を作成したことも確認している。そして、これらの調査が、天保改革の農村政策に引き継がれ、天保14年6月からの御領所改革として結実したことを導いている。

しかし、天保郷帳・国絵図調進の事業が、御領所改革として結実するとまで位置づけるのは、論旨の飛躍があるように思われる。他地域での郷帳・国絵図調進における調査実態、御領所改革の実態を踏まえううえで、論旨の展開が必要となってくるであろう。

第二章は、武蔵国が代官四人で分割担当したの

と同様に、谷町・鈴木両代官所が分担して受け持った河内国における調査の実態を明らかにする。

ここでは、武蔵国の事例にあったように高外地への注目、新田可能地域の書き上げと同様に、郷村高帳に見取場・反高場・流作場や林などを調査して書き上げたことを跡づけている。また、国絵図の調進では、一村限絵図にとどまらず、国絵図の記載内容よりも詳細である郡絵図作成の仕様書や、それに依拠した複数の郡絵図、また郡絵図の描かれた事象に迫り、新開や高入可能地の調査を重視していることを指摘する。これらから、河内国での調進事業が、幕府による一つのモデル・ケースとして極めて厳格な統一基準により、実現したものとす。

天保国絵図の調進事業は、従来の国絵図事業とは異なり、元禄国絵図の写図に変地箇所を「懸紙」によって修正することで進められた。しかし、精粗はあるものの村落単位では、各種の調査が行われていたことがすでに指摘されている<sup>3)</sup>。加えて、本書の福島氏の業績を加味した場合、これら村落レベルでの調査が、国絵図・郷帳を編纂するさい、どのように取舍選択がなされるのか。また、村単位もしくは郡単位で作成された絵図が、国単位つまりマクロなスケールになった場合、描かれる事象の取舍選択がどのようになされているのかを、比較検討することが肝要になってくるものと思われる。これは、もちろん地図史・歴史地理学の分野においても明らかにすべき課題ともいえよう。

第三章は、正保国絵図の特徴を有する鬼洞文庫旧蔵の「和泉一國之圖」（現大阪歴史博物館蔵）を素材として、幕府撰正保国絵図の特徴を備えた「正保和泉国絵図」（神戸市立博物館蔵）と比較しながら、個々の図像表現の解説を行っている。また、正保郷帳の写とされる「和泉国正保村高帳」を用い、村落の把握などの差異についても、郡ごとに検討を行う。これらの比較検討により、「和泉一國之圖」が、幕府への献上本ではなく、地元で参考図とした扣図・窺図・下図等に類するものと想定している。

在地に遺る国絵図は、下絵図から献上図の控まで各種段階が存している。それがどの段階のものかを見定めることは、国絵図の調進の過程を知る

意味でも重要な位置を占めるであろう<sup>4)</sup>。また、氏も指摘するように、絵図そのものを詳細に読解していく必要も存在している。

第四章は、幕府の正保郷帳がどのような内容であったのかについて、写とされる「和泉国正保村高帳」の位置づけを行い、正保2年7月9日年記の「泉州大鳥郡之内上神谷郷帳」と慶安4年3月年記の「和泉国郷村高辻帳」の二冊の記載内容を検討し、それぞれが郷帳作成過程のどの段階で作成されたのかに迫る。そして「和泉国郷村高辻帳」を正保郷帳の正本に近いものと位置づける。

確かに地方には、郷帳（郷村高辻帳）と呼ばれる史料を多く確認することができる。氏のような史料論を踏まえた、位置づけも必要であろう。また、前者の史料を翻刻するのは、後学にも利用可能なようにとの、氏の配慮が感じられる。

第五章は、堺から大和へ通じる主要街道であった竹内街道のルートが、現在のわれわれが知るルートとは異なり、南側の東西道（のちの富田林街道）をとっていたことを、正保国絵図をもとに明らかにする。国絵図を一つの資料として、街道筋を復元したものと見えよう。そして、この変更は、北に位置する古市村の経済的發展が然らしめたと推定している。

論中には、富田林が一つの鍵として頻出するが、挿図とした図1では、残念ながらその場所が明示されていない。『藤井寺市史』所収の図を用いたためと考えられるが、その地域が見えないのである。土地勘のあるものならば、おおよその場所は比定できるが、土地勘のないものには叶わないであろう。

以上取り上げてきた福島氏の論稿は、地方史料を一点一点丹念に読み込んで、論を構築するといえ、氏の研究スタイルが導き出した成果といえるであろう。

氏が研究の中心をおく畿内とその周辺は、かつて安岡重明氏が「非領国」と指摘した<sup>5)</sup>ように、所領が錯綜した特色ある地域である。そして、歴史地理学の立場から、山澄元氏が、その所領構造と藩政村を分析した研究成果<sup>6)</sup>を生み出した地域でもある。本書のはじめにおいて、「近畿畿内地域の政治支配のなかに、さまざまの各分野にわたる歴史の展開があり、それらが地域社会の政治支配史を形成してきた一面を示す」場であり、前著

のあとがきに「いうまでもなく幕藩制社会は、多くの不均等な発展をもった地域より構成されている（中略）さらに、諸地域はそれぞれ一定の歴史的な地位を占め、全体の動向に深く有機的に関連しているものであり、地域相互がきわめて緊密な形で存在する」魅力的な地域といえる。

こういった意味からも、本書は何も歴史学を専攻する者のみならず、近世畿内の村落をフィールドに歴史地理学を、あるいは幕府撰国絵図研究に取り組む者にとっても、先行研究の一つとして、前著ともども必読に値すると考えられる。

（小野田一幸）

#### [注]

- 1) 代表的な成果として、村田路人『近世広域支配の研究』、大阪大学出版会、1995、354頁。久留島浩『近世幕領の行政と組合村』、東京大学出版会、366頁。
- 2) 渡邊忠司『大坂見聞録 関宿藩士池田正樹の難波探訪』、東方出版、2001、222頁。
- 3) 杉本史子「天保国高・国絵図改訂事業の基礎過程」、人民の歴史学106、1990、12-26頁。小野田一幸「天保郷帳・国絵図の改訂調査とその問題 - 近江国を事例に -」、千里山文学論集39、1989、1-26頁。同「天保国絵図改訂事業の一齣」、千里地理通信29、1993、9-11頁。
- 4) このあたりの試みとして、近年では尾崎久美子「天保陸奥国津軽領絵図の表現内容と郷帳」、歴史地理学45-3、2003、1-17頁。
- 5) 安岡重明「近畿における封建支配の性格 - 非領国に関する覚書 -」、ヒストリア22、1958、19-40頁。同「非領国について」、同志社商学15-2、1963、72-99頁。
- 6) 山澄元『近世村落の歴史地理』、柳原書店、1982、317頁所収の以下の論稿。「第二章近世の「郷」の歴史地理学的意義」35-49頁、「第四章畿内における旗本知行地の分布と性格」73-118頁、「第五章畿内における郷と藩政村 - 泉州美木多谷を例として -」119-158頁。